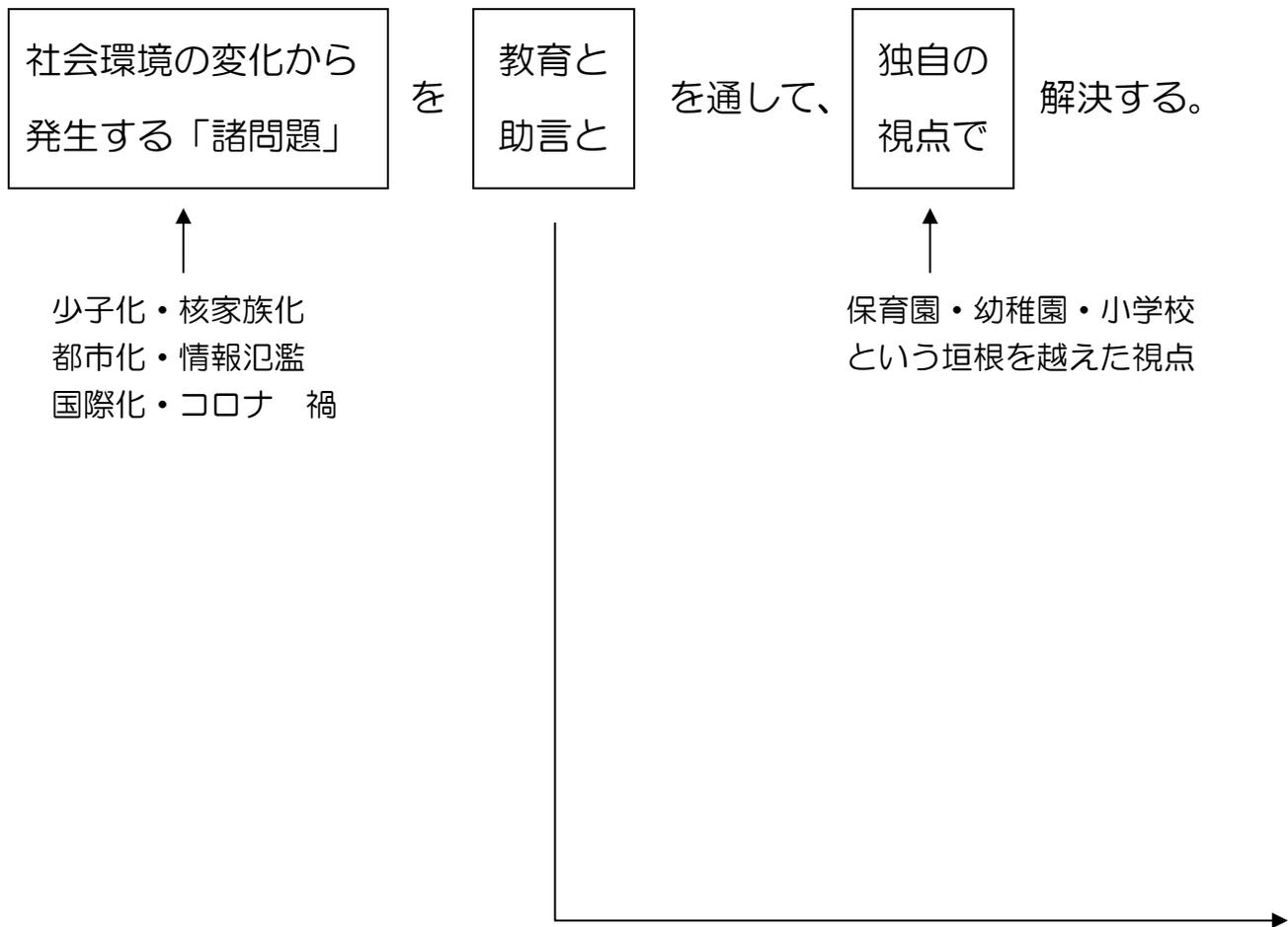


自 令和2年4月 1日
至 令和3年3月 31日

令和2年度 事業報告書



1. 教育事業（教育実践を通して）

- (1) 人と関わる力の育成（幼児とその親） 3
- (2) 考える力の向上（幼児・児童） 5
- (3) 体を動かす力の習得（幼児・児童） 7

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

- (1) 育児・教育に関する相談と助言 9
- (2) 実践研究とその成果の公開 9

3. その他（地域社会への還元）

- (1) 文化的活動の「場」の提供 10
- (2) 震災時に避難する「場」の提供 10

1. 教育事業（教育実践を通して）

前記スタンスに基づき、下記のような教室を設置し、社会的諸問題の解決に当たった。

（参加人数は最多在籍月の数値）

（1）人と関わる力を育成する教育

公益目的支出事業①

■はじめての教室（対象：1歳～3歳の幼児とその親）

【内容】 他の親子と継続的に関わりあう「場」を設定し、広々とした環境の中でクラス担任のリードの下、幼児には遊びを通して社会性を身につけさせ、親には適宜、アドバイスをしたり勉強会を開催したりしながら子育てに関する不安を解消させる。

【結果】 今年度も多くの親子が上記のねらいに沿って活動に参加した。

今年度はまさにコロナに振り回された1年であった。前年度末の休校要請に続く緊急事態宣言による4月・5月の休校。感染防止のための短縮保育、分散少人数保育など、子ども同士が触れ合うことで心身の成長を促す本教室には、コロナ対策は大きな打撃となった。

そのような状況の中でも、感染対策をしっかりと行うことにより、

①1歳児コースでは親に見守られた安心した環境の下、指導者の言葉に耳を傾け、制作や運動、リズムなどの活動に取り組む中で、他者（他の幼児・親・指導者）の存在を意識した行動がとれるようになり、社会性の芽を育てることができた。

②2歳児コースからは親から離れての活動になる。可能な限り自分のことは自分で行う姿勢が身につくとともに、集団の中での一員という意識を芽生えさせることができた。ただ、感染防止の観点から食事を通した学びを十分に経験させられなかったことが悔やまれる。

③3歳児コースは、当教室での今までの活動経験から指導者の指示にしっかり従う姿勢が育まれているため、分散保育の回数を押さえることで、他者との遊びや共同作業を通じて、他者への思いやりも育てることができた。

また、コロナによる他者との接触遮断と、それに起因する育児不安に襲われた親（特に母親）に対し、感染対策をすることで母親同士が交流する場を提供できたこと、指導者のアドバイスを受けることができたことは、母親への大きな支えとなり、感謝の言葉が数多く寄せられた。

参加者 親子 124 組

内 訳 1 歳児親子 39 組 (週 1 回・年 33 回の保育)

2 歳児親子 64 組 (週 2 回 or 3 回・年 67 回 or 100 回の保育)

3 歳児親子 21 組 (週 4 回・年 132 回 5 回の保育)

および 4 日間の夏季特別保育)

保護者に対する指導 1 歳児保護者対象に年 2 回の育児講座ほか

2・3 歳児保護者対象に年 2 回の育児講座。

希望する保護者に対する個別のカウンセリング。



1 歳児コース

2 歳児コース



3 歳児コース



(2) 考える力を向上させる教育

■言語力UP教室（対象：3歳～5歳の幼児）

【内容】 将来、論理的な思考ができる人間に育てるため、「幼児なりに」筋道を立てて物ごとを考える経験をさせておく。

【結果】 学齢ごとに様々な切り口から授業を行ってきたが、その一つとして、年少児（3歳）においては、重さ・かさ・大きさ（広さ）・長さ（高さ）のように数えられないものの「量」感覚を生活体験と結びつけて養った。「大きい」や「小さい」などの形容詞を単体に対して使っている子どもに対し、複数における「比較」という観点からも使わせるようにした。

《重さ》「お父さんの革靴は重い・ぼくの運動靴は軽い」、《広さ》「公園は広い・お部屋は狭い」、《多さ》「お兄さんのご飯は多い、私のは少ない」《高さ》「大人は背が高い・子どもは低い」、《大きさ》「バスタオルは大きい・ハンカチは小さい」、《長さ》「お母さんのブーツは長い・ぼくの長靴は短い」、《幅》「目白通りは広い・家の前の道は狭い」、《厚さ》「図鑑は厚い・絵本は薄い」、《深さ》「プールは深い・水たまりは浅い」、《道のり》「お爺さんの家までは遠い・駅までは近い」などを学び、年中児以降で「幅」「厚さ」「深さ」「道のり」を扱った。今後、年長児までに「～は～より大きい」「～は～よりN個多い」など比較表現の習得拡大と、比較するための「基準」としての「数値」や「単位（mlなど）」の必要性を感じさせるためのカリキュラムを増やしたい。その一つとして「目盛り」に親しませる授業を行い、小学校の算数に繋げていく工夫をしていく。

コロナの影響で4月・5月が休校となったが、6月以降、授業会場を広いホールに移し、換気・消毒に注意を払いながら各学年30回の授業と1回の言語力診断を行った。

参加者 幼児 60人

内 訳 3歳 31人（週1回・年30回＋言語力診断各1日）

4歳 18人（週1回・年30回＋言語力診断各1日）

5歳 11人（週1回・年30回＋言語力診断各1日）

■学習力UP教室・夏季学習教室（対象：小学生）

【内容】 学ぶ喜びを感じ、自信がもてるよう、基礎学力の定着を中心に確実な学力の底上げを図った。基礎学力の充実が学習意欲の素となり、さらに内容を深めた発展的・応用的な学習に向かうためのエネルギーの源となる。それを個に合わせて育てるために、常設教室では教員1人に対し子ども1人または2人で、夏季教室では6・7人という少人数で授業を行う予定であった。

【結果】 常設教室は個別指導のため、感染の可能性が低いと判断し、休校した4月5月以外は授業を実施し、基本的な学力の定着、予習を終えて授業に臨むなど自主的な学習姿勢の涵養ができた。

しかし、夏季教室は1クラス6～7人で実施する形態のため、今年度は実施を見送ることにした。

参加者 常設教室 小学生9人（週1回・年30回）
夏季教室 中止 小学生（夏休み6日間集中）



言語力UP教室

3歳児コース「重い方が下がる」

- ①水がたくさん入ったペットボトルと少ししか入っていないペットボトルとを持って「重い」「軽い」。
- ②水の量が見た目では判別しにくい量で「どちらが重い？」
- ③天秤で測ると「重い方が下がる」。
- ④遊具のシーソーでも「重い方が下がる」現象を確かめる。
- ⑤同じものを同じ数だけ増やしても、やはり「重い方が下がる」。
- ⑥では、見た目では分からない二人の先生の体重は？
- ⑦子どもから「シーソーに乗れば分かるんじゃない?!」という声。

(3) 体を動かす力を習得させる教育

■体育教室（対象：2歳児～児童）

【内容】 幼児には、歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きが「満遍なく」できるようにし、「体を動かすことの楽しさ」を幼児期に覚えさせる。

児童には、自分の体を操る基本的能力を「いろいろな運動」を通して身につけさせ、運動に対する「苦手意識」を持たせないようにする。

【結果】 習い事として運動を行うことには賛否種々の意見があるようだ。

体育教室のような形で運動をする機会を与えることは、指導者の話を聞く時間が多く、また、特定の動きに偏りやすく好ましくない。自由に遊ばせた方が多様な動きが体験でき、結果的に体力向上に繋がるという意見。

一方で、安全面から子どもが自由に一人で遊ぶ場所が少なく、習い事が多い昨今の子ども達は、子ども同士で遊ぶ時間が確保しにくい。意図的に運動を経験させないと体を動かす時間は確保しにくいという意見もある。

両論とも肯定すべき点があるため、当教室では指導者が解説する時間を減らし、子ども自身に考えさせ、自主的に課題に取り組ませることで体を動かす時間を増やし、特定の種目に偏らないように配慮することで、両論が指摘する欠点を補った。

その結果、子どもなりに忙しい毎日の中、いつも同じ友達と運動課題に取り組むことで運動する習慣を身につけさせ、合わせて体を動かす楽しみを覚え、努力して克服する心を養うことができた。

参加者 幼児 110人（週1回・年間30回＋夏季集中授業4日）
小学生 30人（週1回・年間30回＋夏季集中授業6日）

「今日は体育室を10周します。」

「ええ!？」

ただ走っててもつまらないよ。」

そこで切符を渡して1週ずつ切符を減らしていく工夫を。

どんどん減っていく切符に

やる気もUP。

マラソンのような単純な運動こそ

意欲を持たせる工夫が欠かせません。



幼児クラス

■剣道教室（対象：小学生・中学生）

【内容】 剣道を通して心身ともに自己を強く逞しくする。

【結果】 厳しい指導をすると親からクレームが来るような時代になったが、当教室では保護者の理解を得て、剣道を通して「与えられた課題に全力で取り組む」ことを子ども達に厳しく求めている。その厳しさを理解する子どもも増え、最近では稽古前に自主的に来て練習する姿が多くなった。

今年度はコロナのため4月・5月・1月と休校せざるを得なかったが、晒マスクの着用と大声を出さない、対面での接近戦はしないという条件の下で稽古を続けた。

当初はこの稽古で今までと同じ成果が得られるか懸念されていた。しかし、「つばぜり合い」をしないという縛りが、「遠間から撃つ」という姿勢を育むことに繋がり大きな成長を見せた。限られた条件の下での指導の工夫でコロナから「一本」取った年であった。

とはいえ、運動とコロナ感染とは関係が深く、今後も最大限、稽古環境の対策をとって指導を進めていきたい。

参加者 小学生9名 （週1回・年25回）



年度末の「稽古おさめ」
保護者の前で一年の成果を発揮する試合。
面に来たところを
すかさず「小手！」
日頃の稽古の成果が見事に表れた瞬間。
「小手あり！」という審判の声に
会場からは大きな拍手が。

稽古納めの翌日、全日本剣道選手権が行われました。

剣道日本一を決めるその大会でも「つばぜり合いからの引き技」が禁止というルールで試合が行われていました。

そして、そこでも解説者より接近戦の回避で堂々とした打ち合いが多く良かったとのコメントが寄せられており、奇しくも全日本級の試合に通じるルールで子どもを指導していたことが分かりました。

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

（1）育児・教育に関する相談および助言

公益目的支出事業②-1

【内容】 以下のような形で育児や教育に関する相談を受ける。

- ①前記教室に参加する親からの相談を、教室以外でも随時受ける。
- ②教室に通えない親の電話相談や来訪相談等にも応じる。

【結果】 コロナ禍のため、常設教室在籍者以外の来館を極力避けたこともあり、今年度は相談をおよび助言を行う機会がなかった。

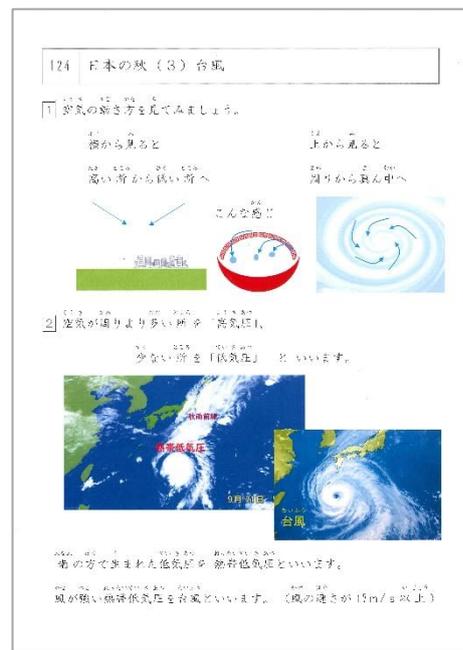
（2）実践研究とその成果の公開

公益目的支出事業②-2

①帰国外国人児童生徒教育の支援

【内容】 日本語力が不十分な児童生徒の言語習得、教科学習フォローの仕方について、小中学校等の教員、ボランティア団体指導者の研修をする。外国人等の入国者は新型コロナの影響で減少はしているものの、すでに来日して就労している家庭は多く、幼稚園・学校などで日本語指導を要する児童生徒が平成30年調査で5万人を超えている。過去、先進的な研究と実践をしてきた当財団の知見を提供することは依然として重要だと認識している。

【結果】 今年度は兵庫県教育委員会から講演の予約が入っていたが、コロナ禍のため中止となった。その他の団体も全て中止となった。代替案として日本語指導者を確保できない学校等に出向き、アドバイスを行う方針でいたが、学校現場もコロナ禍で混乱をしており見送ることにした。



②研究・調査とその公開

【内容】

ア) 外国人児童生徒用教材の公開

外国人児童生徒に対する日本語指導は、最近では教科指導へと広がりを見せており、日本語講師や国語の教員では十分に対応できないことも増えてきた。そこで易しい日本語で書かれた教材を作成し希望者に対し配布した。希望者への配布以外にもインターネットによる教材送信をするとともに、ホームページ内に教材紹介ページを立ち上げ、日本語指導と教科指導の複層的指導のための教材がどうあるべきかのモデルを示した。

イ) 作文教材の公開

感想文が主体の日本の作文教育に一石を投じた「発信力 UP 教室」（現在は生徒募集をしていない）における教材開発の成果を、多くの教育関係者に利用してほしいと思い、今年度より教材の整理と公開を開始した。論理的な思考力に基づいた作文にするため、まずは短い文章で事象を的確に表わすための教材を公開した。最終的には簡潔に書かれた文を繋いで筋道の通った長文を書く教材を公開したい。

3. その他（地域社会への還元）

財団の事業としては位置づけていないが、必要に応じて次のような協力をした。

(1) 文化的活動の「場」の提供

【内容】書道に親しむ保護者が集う「書の会」のために教室を開放した。例年、10人ほどが参加していたが、今年はコロナの感染対策のため、参加人数を減らしてもらった。また、地域の高齢者が集っていた「ブリッジの会」はコロナの影響で全面的に中止してもらった。

(2) 震災時に避難する「場」の提供

【内容】耐震化を進め、震災時に地域の人々の避難場所となるようにする。

【結果】備蓄品の期限を確認し、新しく揃えるなどの対策を継続した。



Hatano Family School